

6. 15日比谷公園を埋めつくした遊歩者、市民、学生、職員の反動的な厚層を、われわれはどのようにとらえなければならぬのか。数々の反戦、反安保の隊列は、なにによって、どのように組織されたのか。

ここからわれわれが学び得る教訓は、特定の日時によって規定された一街頭闘争の意義の解明にとどまらず、七〇年闘争の端初にいついた現段階のわれわれ自身の状況を把握し、今後の方針を確立する上、に大きく寄与するはずである。

6. 6の隊列は、疑いもなく、くへ平連を軸とする六月行動委員、会なる市民組織によって計画され準備された。組織された。6月10日、以来、反戦、反権力闘争の新進、地味をミミリ括いてきた新左翼政治同盟各派は、4.28の時以来一定の政治協定を結ぶ得たにもかかわらず、6.15とその戦術の鏡と断固たる攻撃において独自に組織するべく動き出した。

敵権力の強硬な立ち上がりで、多くの連捕者が出た。戦術をワンを余儀なくされた準備は、個々のセクトに即して考えるならば、必ずしも即戦力では断じてきない。がしかし、市民組織によるよびかけにこれにて結集した数万大衆のエネルギーを、既成セクトが6.15の時まで自らのオルタナティブの対象として追求していかねばならぬことは火を見るより明らかである。

市民レベルでの準備工作が進行するにつれて、各セクトはその中に埋没した。市民運動の一環に自らを組織し、この中で、既成セクトの温存をはかりつつ、6.15をいなしたのである。

もし、6.15を既成セクトの連合がよびかけたのだとすれば、当日結集した民衆の数は、おそらく一万に充たなかったにちがいない。

それはなぜか。一体何が向題なのか。いまでもなく、日共、社民、労働組合といった右翼部分はもはやわれわれにとっては何物でもない。6月10日以後の新たなたたかひの地平を、自己の主権性において支持し、そこに参加せんと意思した民衆にとりて、いま、既成セクトがどのように受けとられているのか、理解されているのか、こそが向題なのだ。ゲバルト拒否をせよとなく、ゲバルトを支持する自らの思想の基軸にするものにとりてこそ、いま、セクトによるゲバルト部隊は、自らの前衛的部分たり得なくなっていることに注目しなければならぬ。ゲバルトによってなにがどのように

しつと、その補完物として機能することを目指すまでにはじかれたのだ。だがしかし、6.15において現実になにができたのか。銀座を埋めつくした人々の波は、敵権力にどのような攻撃をかけた、街撃をえたか。

国会前は静寂だった。権力にわれわれの結集に反応したのは、装甲車によるバリケードであり、その内側に権力の手になる政治的が、民主主義が、平和が敬として存在していたのだ。われわれはだ、装甲車バリケードの外側を、街をぬりぬりたにすぎない。思い出し、市民の提起したスローガンは人街へ、であった。

心情的、形式論理的批判をのりこえ、既成セクトの政治的役割を側から照らしだすこと。そして、二に、ノンセクトの圧倒的な批判に明確な方針を与えること、その指導権を断固として創出することである。

この課題は極めて困難である。絶望的なまでに困難である。だがこの課題をになうことなしに、七〇年闘争を貫徹することは断じてできない。

いま、われわれはこの課題を、日大闘争の内面を、全面的ににたなわなければならない。アイシユピソンの再闘争を分析するゲバルト闘争を貫徹する中で、日大の学生大衆の政治的結集を促しての

自らのセクトのヘルメットをかぶせ、街頭闘争にかりださずして、個別に闘争に大衆のエネルギーを交しこめるのは、自己を結集した改革主義であり、階級的視点が欠落しているなどとした大衆オルグのサホターシユの正言化は結局、街頭闘争至上主義にいつくくはかないのだ。

むろんわれわれもまた、街頭闘争を拒否しはしない。日本若者階級の政治的成熟が、政党の右翼的指揮による公然たる買収りによって、日々遅延される状況の中で、街頭闘争以外にどのような政治行動の現実があり得るのかと自らに向つたならば、われわれもまた街頭闘争の限界を認識した上で、それへの参加を求むるべきである。

だが、街頭闘争において、われわれが重要な勝利する可能性はむろんあり得ない。われわれの勝利は、常に政治的な勝利、したがって一時的、部分的な勝利であるにすぎない。軍事的成功を喫することもあるが、われわれは本質的に大衆に支持と信頼を拡大し政治的変革を達成することに賭けねばならない。

とすれば、日大闘争の中に、われわれが重要な勝利する可能性は、政治的変革をよびおこす可能性は決してなくはない。個別教育委員会例として、ローガン文、日帝打倒と連絡させたがゆえに、八日帝打倒のシムレヒコルで、現実的政治日程を明確にとらえないう努力を代替し、しまったセクトにとってのみ、個別大学闘争は街頭闘争に発展するなどというバカげた、理論が思いつくだ。

だが、現実はそのとおりではない。日帝打倒に集約される具体的なたたかひがいかにあり、それを立体的に結合することが重要なのだ。個別大学闘争たる日大闘争が

その重要な一環であることだれが疑い得よう。少なくとも日大の学生にとりて日大の解放が切実な目標と迫つた事実であるとき、その要求を組織し、階級的視点を欠落させ、一つの力とすることをなせわれわれが逃げられない。

われわれは、そのことを認めるべきではない。日本解放のたたかひは、自己を徹底的に解放することの中から、日帝打倒のゲバルトの意味を、われわれは認めなければならない。

再闘争をくりかえし、階級的視点を維持するときは、それをつきぬき、授業の場から解放の声を聞出し、自らの要求に忠実に闘争を貫徹する公認の闘争を求めなければならない。

われわれの任務は、再闘争の準備工作である。敵日大、学生大衆と、われわれのゲバルト入校禁止による精神的かつ物理的に分断したものを拡大している。これに対し、われわれは早急に激進でシークレットな連絡網を完成させなければならない。

事態はさむくめて緊迫している。各自の人間関係の一切を真摯に徹底的にオルグ展開によって、再闘争の内部からの破壊にむけて奮闘せよ！

心血をそそいで大沢組連絡網を完成せよ！

ただかつ学生及諸君、ただちに工作を開始せよ！

日大全共闘の革命的伝統を継承せよ!

6.15総括と当面の任務

可能なかたの素朴な疑問に答えることがまず、深くない一機主義的な街頭闘争にのみ限らざるセクトに対する批判は、日共のリンチ部部分においてなお公然に存在する。

ノンセクトの遊歩者、市民、学生は、既成セクトのシンパイズムとして機能することのいまい、六を自覚しはじめている。そして、ノンセクト自体の指導権を確保するに努めている。であるがゆえに、六月行動委員の6.15行動の提議に、かくも多くの民衆がその波をよびつづけたのだ。

彼らは既成セクトとは別の方向で、具体的な七〇年闘争を開始した。既成セクトとの共通項を確保

マイホームから街へ、これが市民の行動の全てだ。街から隊列はどこにむかわなければならぬのか。われわれは街から出発するはずではないのか!

だが、既成セクトは沈黙を守り、街の中のデモンストレーションに終始した。街を街でないものに、へ解放区にするすべを、われわれは失っていた。数々の隊列は、6月10日以後のたたかひの伝統の中で、著しい戦術的変革を代償に勝ち得た。幻の軍団ではなかつたのか。たまたわかない幻の軍団だ!

いま、われわれにつきつけられた問題は、極めて明確である。それは次に、既成セクトへの

日大全共闘を再建すること、緊急の任務である。

日大全共闘の革命的伝統は、圧倒的な大衆性を先鋭的な勢力闘争をみごとく統一したところにある。去年の6.11から、30まで、一貫しての厚いつめを路線にこそ、大衆の圧倒的な支持と信頼を確保しつつ、独自の戦術を駆使しつつけたエネルギーこそ、全共闘のあるべき姿であったのだ。われわれは、いまなおこの日大全共闘の革命的伝統を断固として継承しなければならぬ。

セクトの一部は、いま個別日大闘争の意義をどこに矮小化し、階級闘争の全面的展開へという美辞麗句によって、ただかつ大衆に

その重要な一環であることだれが疑い得よう。少なくとも日大の学生にとりて日大の解放が切実な目標と迫つた事実であるとき、その要求を組織し、階級的視点を欠落させ、一つの力とすることをなせわれわれが逃げられない。

われわれは、そのことを認めるべきではない。日本解放のたたかひは、自己を徹底的に解放することの中から、日帝打倒のゲバルトの意味を、われわれは認めなければならない。

再闘争をくりかえし、階級的視点を維持するときは、それをつきぬき、授業の場から解放の声を聞出し、自らの要求に忠実に闘争を貫徹する公認の闘争を求めなければならない。

われわれの任務は、再闘争の準備工作である。敵日大、学生大衆と、われわれのゲバルト入校禁止による精神的かつ物理的に分断したものを拡大している。これに対し、われわれは早急に激進でシークレットな連絡網を完成させなければならない。

事態はさむくめて緊迫している。各自の人間関係の一切を真摯に徹底的にオルグ展開によって、再闘争の内部からの破壊にむけて奮闘せよ！

心血をそそいで大沢組連絡網を完成せよ！

ただかつ学生及諸君、ただちに工作を開始せよ！

たいたかうもの
新聞
フリーダムゲリラ

購読料は
たいてい
所はたいた
いのあると
ころで
もバック
すべ